



チビハネカクシ亜科 (Micropeplinae) 概説

渡 辺 泰 明

チビハネカクシ亜科 Micropeplinae に含まれる種は、いずれも体長が1—3mmの小型で比較的稀な種である。現在まで世界中から3属46種が知られているが、この内 *Peplomicrus* 属は中、南米およびアフリカに分布し、これらの地域から6種が報告されている。また、*Kalissus* 属はカナダおよびアメリカ合衆国(ワシントン)から発見された唯一種が知られているに過ぎない。従って、残りの39種はすべて *Micropeplus* 属に含まれていることになる。

本亜科のものは触角が9節からなり、前背板下面両側にはこの触角を格納する深い触角溝と触角窩が存在し、また、*Kalissus* 属を除いた他の2属のものは頭部、前背板、翅鞘および腹部等体表面の各部分に顕著な縦隆条を具えている等、他のハネカクシ類とは著しく異なった形態的特徴を備えている。

このため、この類の分類学的位置については現在まで種々の取り扱いがなされてきているが、その歴史的な経緯については既に CAMELL (1968) が述べている。

それによれば、本亜科の Type-genus である *Micropeplus* 属の創設者の LATREILLE (1809) は創設時にはこの属をケンキスイ科 Nitidulidae に含めたが、後に (1829) ハネカクシ科に移して *Omalium*, *Lesteva*, *Proteinus*, *Aleochara* 等の属とともに Division Aplatys の1員として取り扱っている。これ以後、本属の分類学的地位に関して本属の形態的特異性を亜科以上の差異として評

価する専門家グループと、亜科よりは下の taxon の差異としか認めない専門家グループとの二つの考えに基づく措置が講ぜられてきた。前者のグループは HEER (1838) によって代表されるが、彼は他のハネカクシ類とはかけ離れた本属の特異性を認めて、彼が7つの division に分けたハネカクシ類の1つの division として取り扱った。この様な取り扱い

は後の多くの専門家に支持され、その後発見された *Kalissus* および *Peplomicrus* の両属を含めて単独の亜科として取り扱われている。

これに対して後者のグループは LATREILLE の考え方と類似して、たとえば ERICHSON (1839, 1840) は本属を *Proteinus*, *Megarthus*, *Phloeobium*, *Glyptoma* (= *Thoracophorus*) 等の属とともに Tribe Proteini の1員として取り扱っている。なお、ERICHSON のいう Tribe は現在では Pinophilini を除いてはすべて亜科に格上げされている。BERNHAEUER & SCHUBERT (1910) も本属を他のハネカクシ類から独立したグループとは認めず、Junk の Coleopterorum Catalogus において *Kalissus* 属とともに Oxyterinae の1tribeとして取り扱っているが、この取り扱いについても GANGLBAUER (1895) を

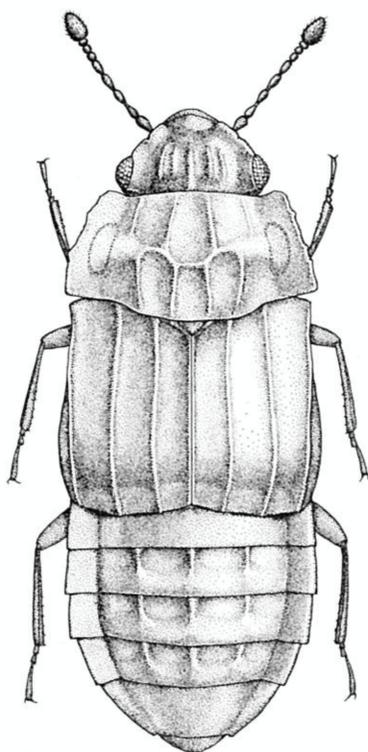


図1 *Micropeplus sharpi* K. SAWADA, ♂, scale: 0.5 mm (Y. WATANABE, 1975)

はじめ多くの専門家等が追従している。

一方、LUBBOCK (1868) はヨーロッパに分布する *Micropeplus staphylinoides* の幼虫の形態的特徴から本属と他のハネカクシ類との区別は恐らく科レ

ベルのものであることを示唆したが、この意見は比較的近年になって重視され、PAULIAN (1941), JARRIGE (1950) および CROWSON (1955) 等によっても指摘されている。PAULIAN は前記 LUBBOCK の研究に基づいて *Micropeplus* 属がケンキスイ科 Nitidulidae かあるいはヒメマキムシ科 Lathridiidae のいずれかに関連していることを示唆し、CROWSON も彼自身による幼虫の研究から *Micropeplus* 属がハネカクシ科はおろか、ハネカクシ上科 Staphylinoidae に含めることについてさき疑問視している。また、KASULE (1966) も幼虫の研究に基づいて *Micropeplus* 属グループを独立した一つの科として取り扱うことの妥当性を主張している。

このように *Micropeplus* グループの分類学的取り扱いに関しては専門家によって種々異なっているが、多くの専門家は亜科として取り扱っているのが現状であるので、ここではその意見に従っておく。

チビハネカクシ亜科の属の検索表

1. 前背板と翅鞘および少なくとも腹部背板の基部3節には顕著な縦隆条が存在する；翅鞘側縁および翅鞘側片の外縁は強く陵状を呈し、翅鞘側片には1縦隆条が認められる……………2
- 1' 前背板および腹部背板には縦隆条が存在せず；翅鞘外縁の肩部から後縁角にかけては陵状を呈さない……………*Kalissus* LÉCONTE
2. 上方から見て頭部の前縁中央附近は上反せず、前頭部の触角瘤間は平圧されるか、半円形あるいは横位に凹陷している；腹部背板の基部3節にはそれぞれ縦隆条が存在している……………*Micropeplus* LATREILLE
- 2' 上方から見て頭部の前縁は強く上反し、頭楯はほとんど垂直で上反した前頭部に隠れる、中央は正中線に沿ってやや幅広い縦凹陷がある；腹部背板の基部3節にはそれぞれ6ないし7縦隆条を具えている……………*Peplomicros* BERNHAUER

Genus *Kalissus* LÉCONTE, 1874

本属はカナダ(British Columbia の Prince Rupert 附近およびヴァンクーバー島) およびアメリカ合衆国(ワシントン州シアトル)のいずれも太平洋側で採集された *K. nitidus* LÉCONTE, 1874 唯一種が知られているに過ぎない。なお、この種は小さな湖の小石の多い水辺に生息しているという。

Genus *Micropeplus* LATREILLE, 1809

本属に含まれる種の多くは林床に堆積した落葉の中や、溪流際あるいは湿地の水辺近く等の環境から採集されるが、北アメリカに分布している *M. neotomae* やカナダおよび北アメリカに分布している *M. browni* のように動物の巣の中から発見されるものも知られている。

本属に含まれる種として現在まで39種が記載され、オーストラリアを除いた世界の大部分の地域から発見されているが、日本からは6種が報告されているに過ぎない。

KOCH (1937) は本属に含まれる種の中で、翅鞘

の縦隆条間につやがなく点刻を持たない種と、強い点刻を持つ種とが存在することに注目して、前者に対して *Arrhenopeplus* なる亜属を設立した。しかしながら、CAMBELL (1968) は翅鞘の縦隆条間につやがなく、なおかつ微小な点刻を有する *M. brunneus* MÄKLIN の存在を指摘し、このような中間的形質を持つ種が存在する以上翅鞘の縦隆条間の形質で亜属を分けることはできないとし、*Arrhenopeplus* 亜属を認めていない。

日本産種の検索

1. 翅鞘の縦隆条間は鮫肌状で点刻されない……………*M. sharpi* K. SAWADA
- 1' 翅鞘の縦隆条間は明瞭に点刻される……………2.
2. 翅鞘側片には明らかな1縦隆条が存在している；腹部各背板の中央縦隆条は両側のものより弱くない……………3.
3. 頭部は点刻されず、各翅鞘には4縦隆条が存在している……………4.
4. 頭部の基部中央に1縦隆条を持ち、各複眼の内縁中央から頭頂方向に短く弱い横の隆線が存在している……………5.
5. 翅鞘および腹部は強い光沢を有する；各複眼内縁中央から頭頂方向にははる横の隆線と頭部基部との間は粒状構造を呈しない……………*M. yasutoshi* Y. WATANABE
- 5' 翅鞘および腹部の光沢は弱い；各複眼内縁中央から頭頂方向にははる横の隆線と基部との間は明らかな粒状構造を呈している……………*M. hiromasai* Y. WATANABE et Y. SHIBATA
- 4' 頭部の基部中央に5縦隆条を持ち、各複眼の内縁中央から頭頂方向にははる横の隆線はない……………*M. fulvus japonicus* SHARP
- 3' 頭部は粗く、密接した顕著な点刻におおわれる；各翅鞘には5縦隆条が存在している……………*M. satoi* Y. WATANABE
- 2' 翅鞘側片には縦隆条が存在せず；腹部各背板の中央縦隆条は両側のものよりはるかに弱い……………*M. kikuchii* Y. WATANABE

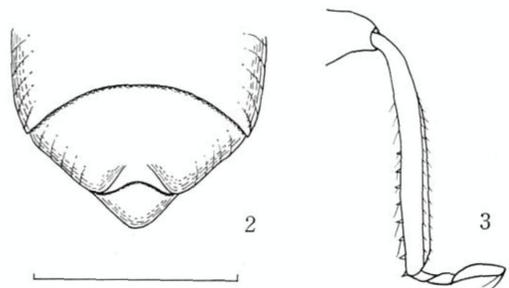


図2-3 *Micropeplus sharpi* K. SAWADA の第2次性徴：2. 腹節，3. 中脛節；scale : 0.25 mm (Y. WATANABE, 1975)

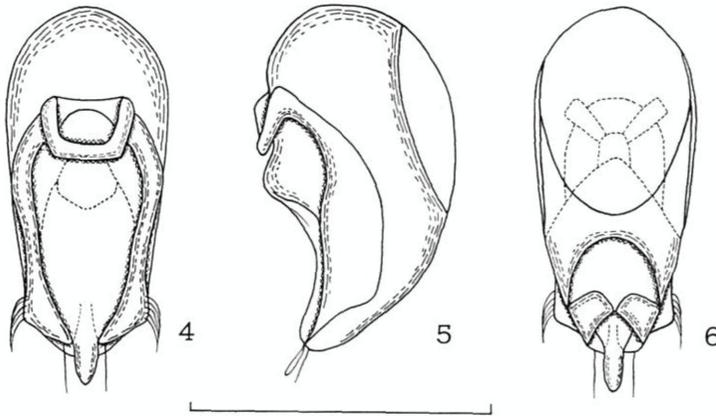


図 4—6. *Micropeplus sharpi* K. SAWADA の♂交尾器：4. 腹面，5. 側面，6. 背面；scale：0.25 mm (Y. WATANABE, 1975)

***Micropeplus sharpi* K. SAWADA, 1964**

体長 1.8mm。体はやや幅広くの長楕円形を呈し、光沢は弱く、幾分くすんでいる。体色は暗赤褐色で、頭部、翅鞘および触角末端節は暗色で、末端節を除いた触角および前背板両側の上反部は幾分明るい。頭部はほぼ三角形で、前縁から両側にわたって細い隆起線で縁どられる。触角は9節で短く、末端節は最も大きく長球形を呈する。頭部中央基半に弱い縦隆起を具え、頭頂両側にもそれぞれ1対の縦長の隆起が存在している。前背板は幅広く、前方に狭まる梯形を呈する。背面は中央域が凸隆し、隆条によって仕切られた6室が認められる。それらの上面は幾分凹陷し、頭部と同様な微細構造によっておおわれる。翅鞘は長さより明らかに幅広く、前背板よりも僅かに幅広い。翅鞘の末端1/5は後縁にそって横位に凹陷する。各翅鞘には4縦隆条が存在するが、会合部のものは他のものに比し弱い。これらの縦隆条間の表面は点刻されず、前背板と同様な微細構造によっておおわれる。腹部はやや幅広く、末端に向ってゆるやかに収斂する。各節の背板は点刻されず、皮革様微細印刻によっておおわれる。基部3節の各背板は基半が前縁にそって横位に凹陷し、そこには平行した3縦隆条が存在し、それらはそれぞれの後縁の前で消失する。雄は中・後脛節内縁の後半にそれぞれ約8個の微小な歯状突起を具え、腹部末端節腹板の後縁中央は浅く半円形に湾入し、湾入部の前方はやや凹圧される。

本種は翅鞘縦隆条間が点刻されず絞肌状を呈するのみのきわめて特異な種で、ヨーロッパに分布している *M. tessellura* に近縁であるが、日本から発見されている他の種類とはきわめてかけ離れている。

分布：日本（本州）。

本種は奈良春日山の広葉樹林の林床に堆積した腐植から採集された1♂1♀によって記載された種で、その後の採集記録はない。

Micropeplus yasutoshi

Y. WATANABE, 1975

体長2.6mm。体は幅広く長楕円形を呈する。翅鞘および腹部は強い光沢を有するが、頭部および前背板は幾分鈍い。体色は茶褐色で、口器、触角および各脚の附節は黄色味を帯びる。頭部は幅広く、やや三角形を呈し、背面は点刻されないが、全面にわたってやや粗い皮革様微細印刻が認められる。前頭域は幅広くかつ浅く、また基部前方の中央両側はやや深くそれぞれ凹陷している。中央基半には正中線にそって縦隆条が存在し、また、

各複眼の内縁中央から頭頂方向に短く、弱い横隆条が存在している。触角は9節で短く、末端節はきわめて大きく、長球形を呈する。前背板は前方に狭まる梯形を呈し、長さより顕著に幅広い。背面は頭部と同様な皮革様微細印刻におおわれる。各側部は側縁にそって幅広く上反しているが、中央は凸隆し、隆条によって仕切られた6室が認められ、各室の上

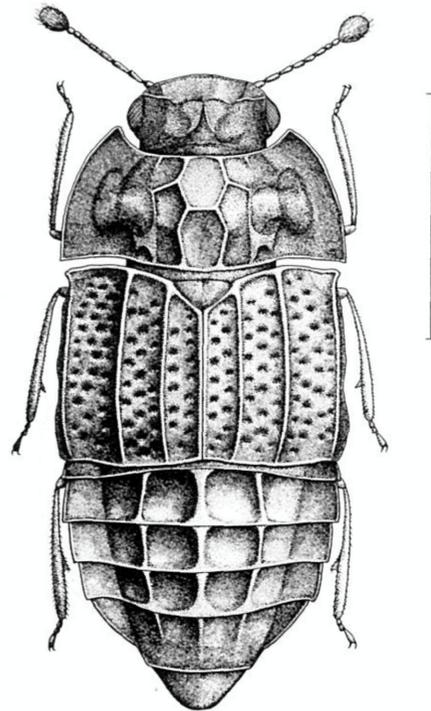


図 7. *Micropeplus yasutoshi* Y. WATANABE, ♂；scale：1.0 mm (Y. WATANABE, 1975)

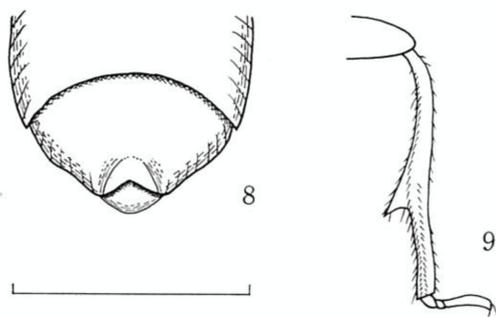


図 8—9. *Micropeplus yasutoshii* Y. WATANABE
♂の第2次性徴：8. 腹節，9. 中脛節；scale：
0.25 mm (Y. WATANABE, 1975)

面は幾分凹陷している。前方の各側室の外側には小さいがやや深い凹陷が、また後方の各側室には大きく浅い凹陷がそれぞれ存在している。翅鞘は四角形で幅は長さの約1.5倍で、前背板とほぼ同幅である。各翅鞘には4縦隆条が存在しているが、会合部のもは他のものに比して弱い。縦隆条間には粗い不規則な点刻列が存在し、内方からの第1室は2列、第2室は3列、第3室はほぼ4列を呈している。翅鞘側片には明らかな1縦隆条が存在し、この縦隆条と側片隆条との間には2列の、また翅鞘側縁隆条との間には1列の不規則な非常に粗い点刻列が存在している。腹部はやや短く、後方に向って収斂する。各背板は皮革様微細印刻におおわれる各側方上反部および末端背板を除いては点刻されず、また微細印刻も認められない。基部背板はそれぞれ基半が横位に凹陷し、平行した顕著な3縦隆条を備えているが、それらはいずれも前方および後方で拡大している。また、第4背板にも同様な隆条を備えているが、これらはいずれも中央附近で消失している。雄は中・

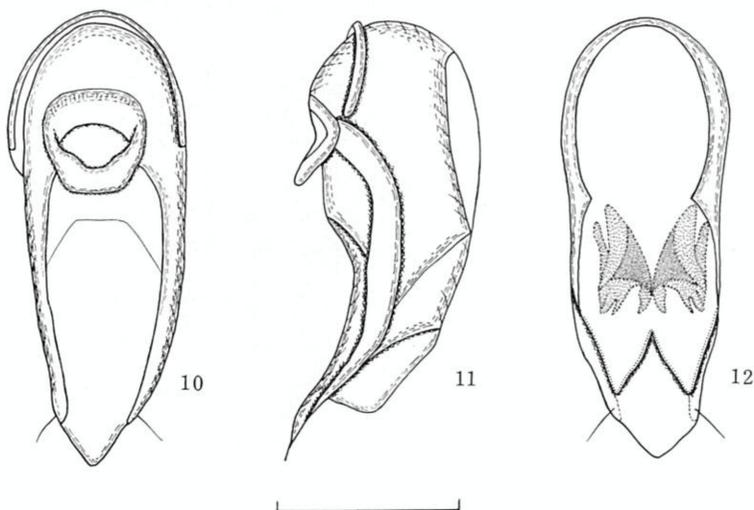


図 10—12. *Micropeplus yasutoshii* Y. WATANABEの♂交尾器：10. 腹面，
11. 側面，12. 背面；scale：0.25 mm (Y. WATANABE, 1975)

後脛節の内縁にそれぞれ三角形の歯状突起を有しているが、後脛節のものは中脛節のものに比し大きく顕著である。また、腹部末端節腹板の後縁中央は幅広く浅く湾入している。雌の中・後脛節および腹部末端節にはこのような性徴が認められない。

分布：日本（本州）。

本種の全個体は奥多摩御岳山の潤葉樹林内に堆積した枯れ葉をツルグレン装置によって抽出して得られたものである。

Micropeplus hiromasai Y. WATANABE
et Y. SHIBATA, 1965

体長 2.6mm。体は幅広い長楕円形。幾分光沢を有するが、頭部および前背板は鈍い。体色は赤褐色で、複眼周辺、前背板の両側、触角および脚は明るい。頭部は三角形に近く、きわめて幅広く、ほぼ長さの2倍を呈する。背面は点刻されないが、細かな皮革様微細印刻が認められる。触角瘤間の前頭域は幅広くかつ浅く、一方、基部前方の中央両側は深く凹陷される。基半中央には正中線に沿って1縦隆条が存在し、また、各複眼内縁の中央から頭頂方向に細い横の隆線がはしっている。そしてこの隆線と頭部基部との間は粗い粒状構造を呈する。触角は9節で短く、末端節は最大で、長球形である。前背板は前方に狭まる梯形で、幅はゆりに長さの2倍を越え、頭部よりも顕著に幅広い。背面には点刻を持たないが、頭部と同様な皮革様微細印刻が認められる。中央域は凸隆し、隆条によって仕切られた10室が認められるが、その内の3室は前方に、2室が中央に、そして5室が後方に存在している。しかし前方および後方の中央室を除いた他の室はやや不明瞭である。各室の上面は凹陷し、後方の各最外側室のすぐ外側にはそれぞれ大きく浅い凹陷が存在している。翅鞘は四角形で、前背板とほとんど同幅だが、明らかに

長さより幅広い。各翅鞘には4縦隆条が存在しているが、これらの隆条間にはやや深い点刻からなる不規則な点刻列が存在し、内方からの第1室は2ないし3列、第2室は3列、第3室は4列を呈している。翅鞘側片には明らかな1縦隆条が存在し、これと側片隆条との間には3列の、また、翅鞘側縁隆条との間には1列の粗い不規則な点刻列が存在している。腹部はやや短く、後方に向って収斂する。背板は皮革様微細印刻が認められる各側方上反部、第5背板の後半域と第6背板を除いては点刻および微細印刻は存在しない。基部3背板のそれぞれの基半は明ら



図 13. *Micropeplus hiromasai* Y. WATANABE et Y. SHIBATA の頭部 ; scale : 0.2 mm (Y. WATANABE, 1975)

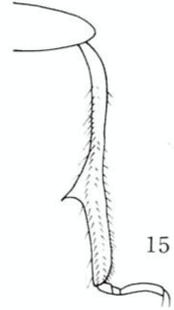
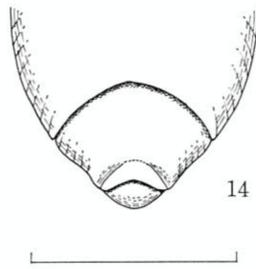


図 14—15. *Micropeplus hiromasai* Y. WATANABE et Y. SHIBATA ♂ の第 2 次性徴 : 14. 腹節, 15. 中脛節 ; scale : 0.25 mm (Y. WATANABE, 1975)

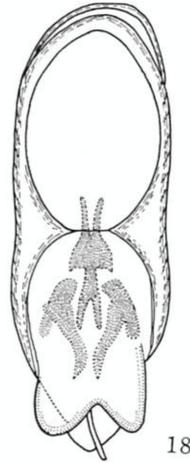
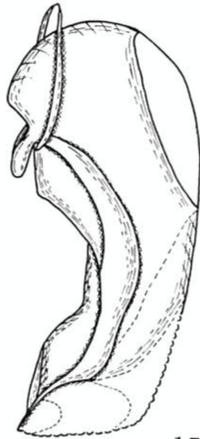
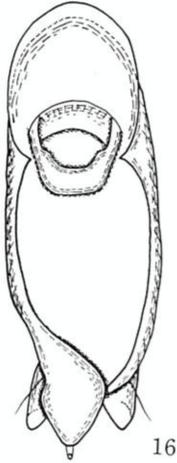


図 16—18. *Micropeplus hiromasai* Y. WATANABE et Y. SHIBATA の holotype の ♂ 交尾器 : 16. 腹面, 17. 側面, 18. 背面 ; scale : 0.25 mm (Y. WATANABE, 1975)

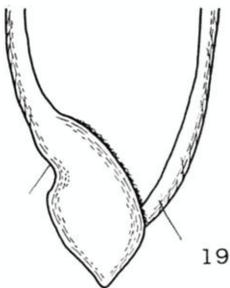


図 19. 北海道倶多楽湖産の *Micropeplus hiromasai* Y. WATANABE et Y. SHIBATA の ♂ 交尾器 (Y. WATANABE, 1975)

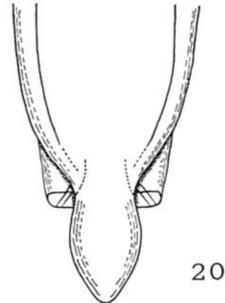


図 20. 欧州産 *Micropeplus longipennis* KRAATZ の ♂ 交尾器 (Y. WATANABE, 1975)

かに横位に凹陷している。また、平行した顕著な3縦隆条が存在しそれぞれは中央前方で強く収縮している。さらに第4背板にも同様な縦隆条が存在しているが、これは背板中央附近で消失している。基部5腹板のそれぞれには中央に3条、各側方に2条の合計7条の短い縦隆条が存在している。雄は中・後脛節内縁にそれぞれ三角形の歯状突起を有するが、雌では欠いている。雄の腹部末端腹板の後縁中央は浅くかつ幅広く湾入し、湾入部の前方は多少平圧されるが、雌の末端腹板は正常な形態を呈している。

分布：日本（北海道・九州）。

本種は九州祖母山の五合目附近の溪流際の落葉中から採集された個体に基づいて記載された種であるが、その後、筆者は北海道登別近くのクッタラ湖畔および日高山脈の幌尻岳から採集することができた。しかし、これら北海道産の個体は祖母山産の個体に比し、体がより強壯で、体色がより暗く頭部の基部中央縦隆条および各複眼内縁中央から頭頂に向う横隆線がより顕著である等の差異が認められたが、このような特徴はヨーロッパに分布している *M. longipennis* KRAATZ に類似している。しかしながら雄交尾器の形態は *M. longipennis* とは異なり、祖母山産の個体とはほぼ一致している。

***Micropeplus fulvus japonicus* SHARP, 1874**

体長 28mm。体は幅広い長楕円形を呈する。体色は黒褐色で触角および脚は赤褐色。頭部はほぼ三角形で、幅は長さの約2倍、表面は点刻されず、全面皮革様微細印刻におおわれるが、前頭域では側方に比しより細い。前頭域は幅広く浅く凹陷しているが、基部前方の各側部は斜めに深く凹陷している。基半中央に正中線にそって1縦隆条がはしり、その各側部にそれぞれ2縦隆条が存在し、最も外側のもは末端1/2が内側に強く曲っている。触角は9節で短く、末端節は長球形で最大。前背板は顕著に幅広く、長さの2倍以上で、中央附近が最も幅広く、前方に向かって明らかに、後方に向っては弱く狭まる。前縁附近の各側部にはそれぞれ小さいが深い1孔点があり、また後縁前方の各側部には大きい浅い凹陷が存在している。中央域は凸隆し、隆条によって仕切られた10室が認められる。その内の3室は前方に、2室は中央に、そして5室は後方に存在している。各室の上面は明瞭に凹陷し、表面の皮革様微細印刻はきわめて不明瞭である。翅鞘は後方に向って

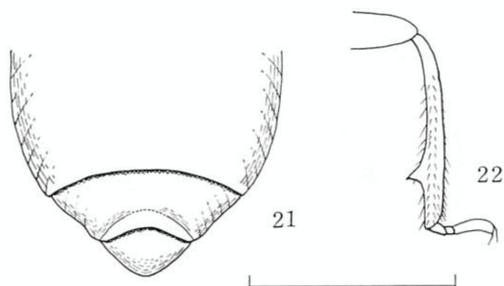


図 21—22. *Micropeplus fulvus japonicus* SHARP
♂の第2次性徴：21. 腹面，22. 中脛節；
scale: 0.25mm (Y. WATANABE, 1975)

幾分拡がり、長さより幅広い、各翅鞘には4縦隆条が存在し、それらの間は不規則なやや粗い点刻列を備えている。内方からの第1室は2列、第2室は3列、第3室は4列を呈している。翅鞘側片内には1縦隆条が認められ、この隆条と側片隆条との間には粗い不規則な4点刻列が、翅鞘側縁ととの間には1列の点刻列が存在している。腹部は短く、末端に向って収斂する。各背板の側方上反部および末端背板を除いては皮革様微細印刻が認められるが、他は平滑で、点刻および微細印刻は認められない。基部4背板の基半はそれぞれ深く横位に凹陷し、平行してはしる3縦隆条を具えている。また、基部5腹板のそれぞれ基部の各側部に短い2縦隆条が存在している。雄は頭部前縁の中央は鋭く突出し、中・後脛節のそれぞれ内縁には三角形の歯状突起を具え、腹部末端腹板の後縁中央は浅く幅広く湾入し、湾入部の前方は半円形に平圧されている。一方、雌では頭部

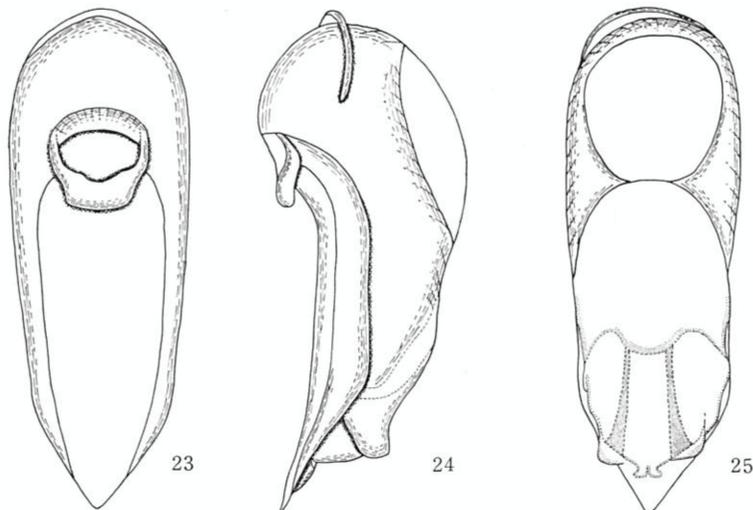


図 23—25. *Micropeplus fulvus japonicus* SHARP の♂交尾器：23. 腹面，
24. 側面，25. 背面；scale: 0.25 mm (Y. WATANABE, 1975)

前縁はゆるやかな弧状を呈するのみで中央は突出せず、中・後脛節の内縁に歯状突起は存在せず、腹部の末端腹板は正常な形態を呈している。

分布：日本（本州・四国・対馬）。

本種はゴミや落ち葉等の下から発見されるが、吉井良三博士によれば秋季脱殻後田圃に積み重ねられたわら束の中から多数の本種が採集されたという。

***Micropeplus satoi* Y. WATANABE, 1975**

体長 2.1 mm。体は幅広の長楕円形で、光沢は弱い。体色は黒褐色で、触角の基部6節は黄色、残りの各節、前背板の両側、翅鞘の末端および脚は赤褐色を呈する。頭部はほぼ三角形で、幅は長さの約2倍。上面は非常に粗く、密接する点刻を密に側えている。正中線に沿ってやや幅広い縦凹陥を備えているが、その凹陥の表面は粗い皮革様微細印刻によっておおわれ、点刻はほとんど認められないが、基半には弱い縦隆条が存在している。触角は9節で短く、第1節は大きく末端に向かって拡大し、3—6節は徐々に短くなるが、いずれも幅より長く、第8節は横位で、第9節は長球形で最も大きい。背板は幅広く長さの2倍以上で、頭部よりも明らかに幅広い。両側は中央附近が角張り最も幅広く、前方に向かって強く狭まるが、基半はほとんど平行。背面は中央域が強く凸隆し、隆条で仕切られた10室が認められ、前方に3室、中央に2室そして後方に5室が存在して

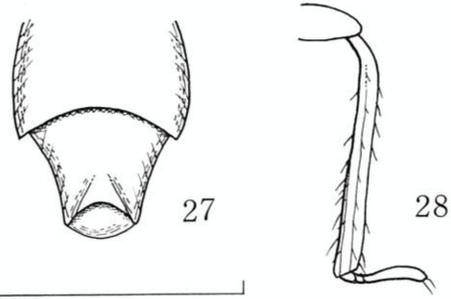


図 27—28. *Micropeplus satoi* Y. WATANABE の第2次性徴：27. 腹節，28. 中脛節；scale：0.25 mm (Y. WATANABE, 1975)

いる。各室の上面は凹陥し、不規則な粗いが浅い微細印刻でおおわれる。各側方は明瞭にやや幅広く上反し、表面は一樣に密に微細印刻でおおわれるが点刻は認められない。翅鞘は長さより幅広く、前背板より僅かに幅広い。後方に向かって幾分拡がり、背面は凸隆するが、後縁にそって末端1/5は急激に横位に凹陥する。各翅鞘は5縦隆条を備え、内側の3縦隆条はそれぞれ翅端にまで伸長するが、第4縦隆条は翅端に達せず、末端の横位凹陥の前で消失する。縦隆条間には大きな粗い点刻による不規則な点刻列を有し、第1室は2列、第2室は基半は2列、後半が3列、第3室は基半は3列、後半が2列、第4室は2列を呈している。翅鞘側片には1縦隆条が存在し、それと側片隆条との間には不規則な2点刻列があり、また、翅鞘側縁との間には1点刻列が存在している。腹部は短く、末端に向かって収斂する。各背板は横位に凹陥する基半を除いては皮革様微細印刻によっておおわれ、基部4背板にはそれぞれ平行にはしる3縦隆条が存在しているが、最後のものはそれぞれ後縁の前方で消失する。雄は腹部末端腹板の後縁中央が浅く弧状に湾入し、湾入部の両側はやや角張り、前方は弱く平圧され平滑である。

一方、雌の末端腹板は正常の形態を呈している。

本種はヨーロッパに分布している *M. porcatus* に近縁であるが、前背板の隆条は弱く、さらに隆条に囲まれた室の凹陥も弱いことで区別される。また、カナダに分布している *M. cribratus* にも類似しているが、頭部の clypeo-frontal suture は中央で不明瞭となり、基部中央の凹陥はより幅広く、その中の縦隆条がより強いことで区別される。

なお、*M. porcatus* および *M. cribratus* の両種は形態的に酷似しており亜種の関係を思わせるが、CAMBELL (1968) は雄交尾器の若干の差異を指摘し別種として取り扱っている。

分布：日本（北海道）。

本種は幾春別の流れの際に堆積した落葉の中から採集された1♂によって記載されたが、その後の採集例はない。

***Micropeplus kikuchii* Y. WATANABE, 1975**

体長 2.0 mm。体は幅広の長楕円形で、光沢はやや

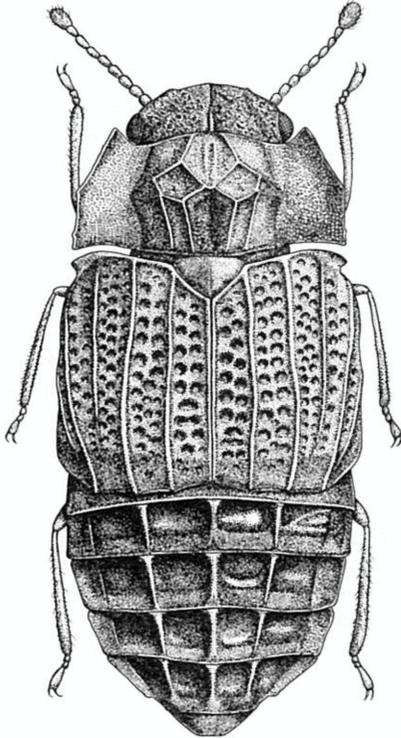


図 26. *Micropeplus satoi* Y. WATANABE, ♂. scale : 1.0 mm (WATANABE, 1975)

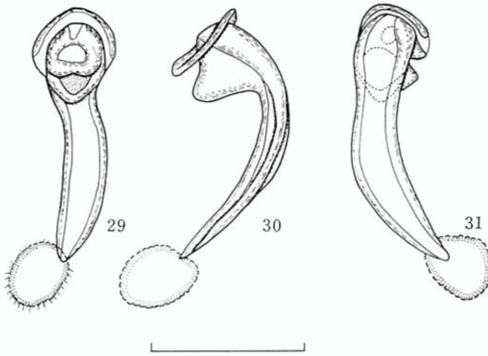


図 29—31. *Micropeplus satoi* Y. WATANABE の♂交尾器: 29. 腹面, 30. 側面, 31. 背面; scale: 0.25 mm (Y. WATANABE, 1975)

鈍い、体色は赤褐色で、頭部は黒色だが、触角は幾分明るい。頭部はほぼ三角形を呈し、顕著に幅広く長さの約3倍。側縁は弧状で強く上反し、前縁は明らかにえぐられる。背面は点刻されないが、やや粗い皮革様微細印刻におおわれる。頭頂の両側にはそれぞれほぼ三角形を呈する不明瞭な隆起が認められ、中央にはやや幅広い縦凹陥があって、その中の基部2/3には明瞭な1縦隆条が存在している。触角は9

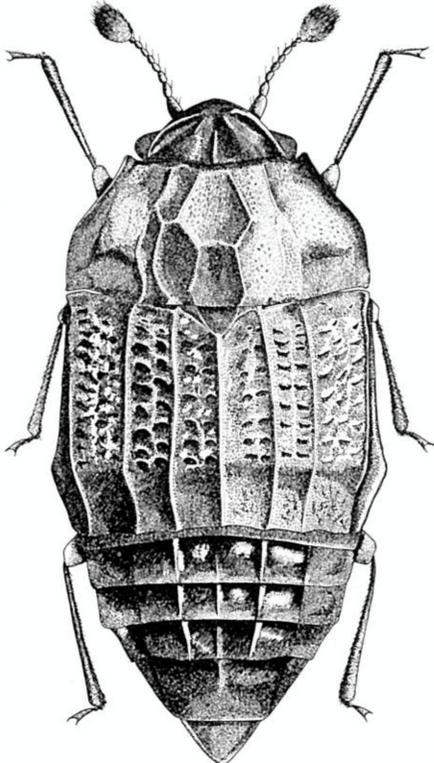


図 32. *Micropeplus kikuchii* Y. WATANABE, ♀, scale: 1.0 mm (Y. WATANABE, 1975)

節で相対的に短い。第1節は強壯で末端に向かって拡大し、3—6節は徐々に長さが減じ、第8節は横位、第9節は最大で細毛を密生する。前背板は顕著に幅広く長さの約2倍、中央直前が最も幅広く、それより基方は微弱に、しかしそれより前方は強く狭まる。前縁角はやや鋭く尖り前方に突出するが、後縁角はほとんど直角を呈する。背面は一様にやや粗い皮革様微細印刻におおわれ、側方は幅広く上反する。中央域は顕著に凸隆し、隆条に仕切られた8室が認められ、3室は前半に、5室は基半に存在している。しかし、基半最外縁の各室は他室より顕著に細く、境界が若干不明瞭である。各室の背面は凹陥する。各前方外側室のすぐ外側に小さいが明瞭な1凹陥があり、また基方最外側室の外側にもやや大きな凹陥が存在している。翅鞘は幅より明らかに長く、前背板より僅かに幅広い。後方1/5は幾分拡大している。背面の中央後方は隆起しているが、後方1/5は後縁にそって急激に横位に凹陥している。各翅鞘は全長にわたり平行に走る4縦隆条を有する。これらの隆条間には大きな点刻が連なって形成された不規則な点刻列が存在し、第1室および第2室では2列、第3室では3列が認められる。翅鞘側片に縦隆条は存在せず、粗い点刻による不規則な4点刻列が存在するのみである。腹部は相対的に短く、末端に向つて明瞭に収斂する。腹部各背板は点刻されず、前背板と同様な皮革様微細印刻によっておおわれ、基部3背板にはそれぞれ平行した顕著な3縦隆条が存在するが、中央のものは両側のものに比しきわめて細く不明瞭である。また、第4背板の中央基半には細く短い1中央隆条が存在する。基部4腹板にはそれぞれの側方に全長にわたって2対の顕著な縦隆条が存在する。第5腹板の側方にも2対の縦隆条が存在するが、内方のものは外方のものより短くて後縁に達せず、外方のものは不明瞭に幅広く隆起している。

本種の外部形態はきわめて特異で、特に頭部の形状は一見 *Peplomicrus* 属を思わせる。しかし他の形態的特徴、特に縦隆条等は *Peplomicrus* 属とは明らかに異なっている。また、本種の翅鞘縦隆条間の点刻はきわめて大きく *M. procatus* group を思わせるが、翅鞘側片には *M. tessera* の様に縦隆条を欠いている。このように本種は現在まで世界中から知られている *Micropeplus* 属に含まれる他の種とはかなりかけ離れているので、亜属あるいは1つの種群として取り扱うべきかもしれない。

Genus *Peplomicrus* BERNHAUER, 1928

本属はスリナム (Dutch Guiana) から発見された *uyenboogaarti* に基づいて BERNHAUER により、*Micropeplus* 属の1亜属として設立されたが、後に CAMELL (1968) によって属に格上げされた。

現在まで、1種が中央および南アメリカから、2種が中央アメリカから、1種が南アメリカから、そして2種がアフリカから、合計6種が知られているに過ぎない。

(東京農大)

○カブトムシの雌雄型

昨年(1978)6月20日に茨城県石岡市八木の小松崎隆夫氏より国立科学博物館に見事なカブトムシの雌雄型が寄贈されたので報告しておく。

カブトムシ *Allomyrina dichotoma* (LINNÉ, 1771)

1♂, 茨城県石岡市八木, 20. vi. 1978, 小松崎隆夫採集。

体は一面に微毛を装い、普通の雌と何等変る所がないが、頭部に多少曲ってはいるが、立派な雄の角状突起がある。交尾器も通常の雌のもので、雄ではない。

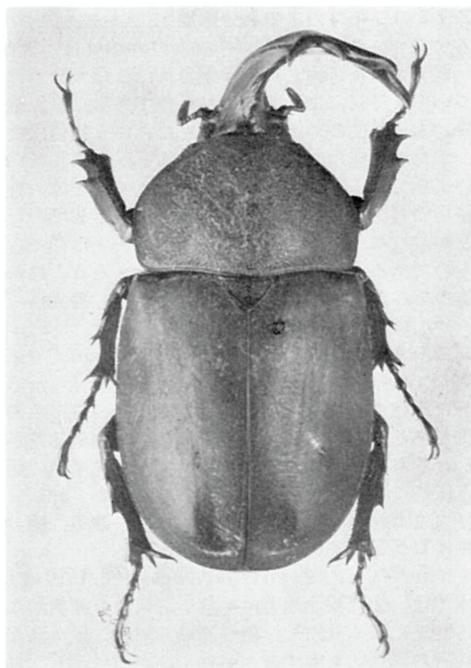
一見、雌の体に雄の頭部を付けた様な感があるが、筆者の手許に届けられた時には極めて元気で、行動も通常の個体と全く変る所がなかった。新鮮な標本を作るためにやむなく22日に殺したが、殺すのが惜しい程であった。

なお、この標本は雌雄型とするよりはむしろ畸型とした方がよいかも知れない。

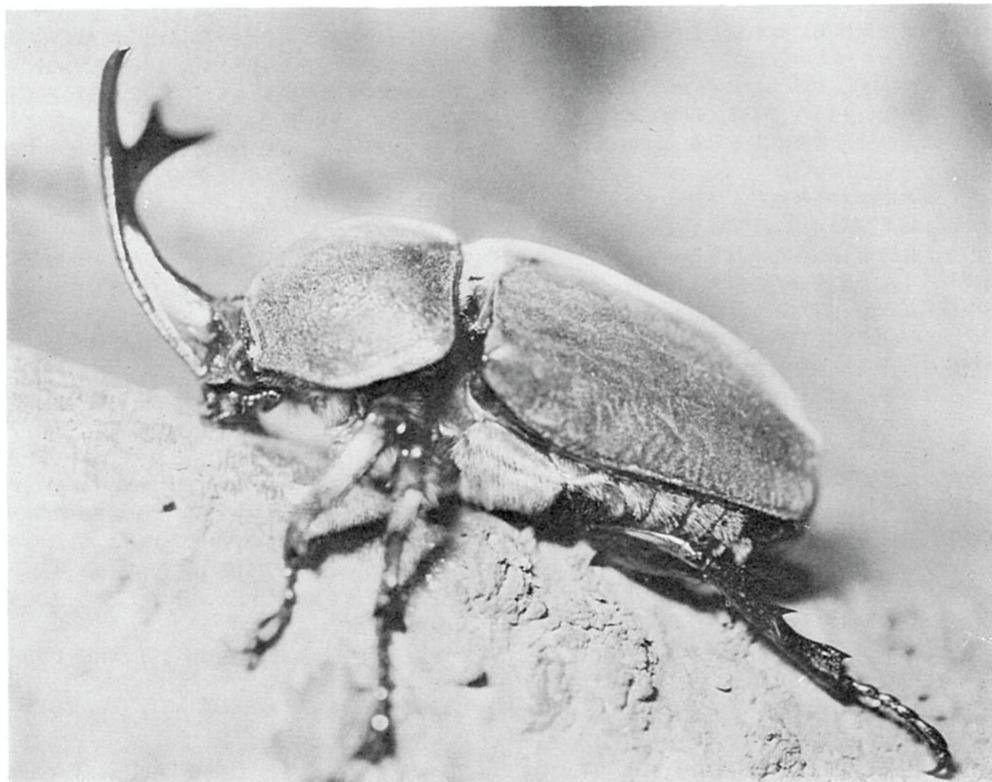
この個体は、飼育中の多数のカブトムシに混ってただ1頭だけ見出されたもので、他のものはすべて通常のものであった由である。

最後ではあるが、貴重な標本を寄贈された小松崎隆夫氏夫妻に感謝する。

(国立科学博物館, 黒沢良彦)



カブトムシの雌雄型(畸型?)背面



カブトムシの雌雄型(畸型?)生時側面

○アマミコフキコガネの新分布地

アマミコフキコガネ *Melolontha tamina* は、1964年、奄美大島及び徳之島で採集された2頭の標本に基づいて、野村により記載された種である。原記載以降、本種が他の地域で採集されたという報告はなく、また模式産地においてもほとんど採集されていないようである。ところが、筆者の1人渡辺は、奄美諸島の喜界島において多数の本種を採集していたことが最近になって判った。採集のデータはやや古いものであるが、恐らく新しい産地であろうと思われるので、ここに報告する。26♂♂, 6♀♀, 喜界島, 24. vi. 1964, 渡辺 徳採集。

同島の本種は、オオコフキコガネ *M. frater* やオキナワコフキコガネ *M. masafumii* にも見られるような上翅の毛の色に個体により灰白色～黄褐色の変化があるほか、尾節板の形状にも若干の個体差が見られるものの、雄交尾器については模式産地の個体と区別できるような差異は認められなかった。

(東京都練馬区, 小林裕和・仙台市, 渡辺 徳)

○キイロゲンセイの雌雄

キイロゲンセイ *Zonitis japonicus* PIC, 1910 は、日本では、北は東北地方の南部から南は九州南端に至る暖地に広く分布し、伊豆諸島, 対馬, 屋久島など周辺の属島にも産する。海外では台湾に産し、私は南ベトナム産(1♀, Bobla, 24. viii. 1962, 井上定信氏採集)とマレー半島産(1♀, Gap, 23. iii. 1974, 清山好美氏採集)の本種とおぼしい標本も検した。また、セレベスから記載された, *Z. geniculata* FAIRMAIRE, 1887 も本種に酷似して同一種かも知れないという(河野, 1936)ので、本種はあるいは南の熱帯地方に広く分布し、かなりの異名があるのかも知れない。

一方、日本には本種の他に、ツマグロキゲンセイ *Z. cothurnata* MARSEUL, 1873 が産する。この種類も、東北地方南部から九州に至る地域と上記の属島に産し、キイロゲンセイの産する所には、個体数こそ少ないが、影の寄り添う様に必ず常にツマグロキゲンセイが産する。しかも両者は混棲して、私は福島県会津若松市東山で、1949年8月3日にイヌザンショウの花を訪れた多数のキイロゲンセイに混ってツマグロキゲンセイ2♂♂を採集している。また、マレー半島でも、キイロゲンセイと共にツマグロキゲンセイが採れている(Gap, 13. ii. 1974, 清山好美氏採集)。

私の手許にある多くのキイロゲンセイを調べてみると、大小の個体変化は極めて著しいが、すべて雌ばかりである。一方、ツマグロキゲンセイの方は、調べた個体数はキイロゲンセイよりはるかに劣るが、すべて雄ばかりで、しかも大きさの個体変異は少ない。このことは、とりもなおさず、両種は同一種で、キイロゲンセイは雌、ツマグロキゲンセイは雄であることを暗示しているものと考えられるが、残念ながら、両種の生態が皆目判らない現在では、単なる推定の域を脱することができない。願わくば、

どなたか両種の生活史を解明して頂けないものであろうか。交尾例の報告でも結構である。もちろん、ツチハンミョウ科であるから、過変態をすることは確実であるし、寄主はオオハキリバチまたはその近似種であろうと推定されている。

ちなみに、この科では、雌雄が異なる色彩や形態をしていて、全く別種と考えられていた例は少なくない。日本産では、トサヒラズゲンセイ *Horia to-sana* KONO, 1936 の雄がササキトビロゲンセイ *Cissites sasakii* KONO, 1936 とし、長い間別種と考えられていた例は有名であるが、台湾に産するミワキゲンセイ *Zonitis miwai* KONO, 1936 や朝鮮のキムキゲンセイ *Z. kimi* KONO, 1936 も雌雄で全く異なる色彩斑紋をしている。

(国立科学博物館, 黒沢良彦)

○ムツボンテントウの雄はいない?

ムツボンテントウ *Sticholotis punctata* CROUCH は活動期は野外であまり見かけない虫で、生活史はほとんど判っておらず、幼虫も未知であるが、冬期樹皮下で越冬中のものは割合よく採れる。筆者の一人、本塚はテントウムシ科の雄内部生殖器の比較形態を目的とする材料として、福井県大野市内のケヤキ樹皮下から、1978年3月と11月に本種の成虫を合計37頭採集して解剖したところ、ことごとく雌であった。そのことについて報告を受けた佐々治は、手持の標本(各地産)42頭を調べたが、尾端の形状はすべて一様であることを確認した。同属の他種では、雄は尾端に小さな凹みがあって明らかに区別できるので、上記の標本はすべて雌であろうと推定される。念のため、数頭を解剖してみたが、雄は含まれていなかった。雄だけが異なった所に越冬するのかもしれないし、越冬前に交尾をすませ雌だけが越冬することもありうるが、テントウムシ類の一般習性から推察して、その可能性は極めて低い。そうすると、この種には雄が存在せず、単為生殖によって世代を繰返していることになる。飼育して発生を確かめる必要があるが、もし、確かだとすると、テントウムシ科では最初の例となり、大変興味深い事実である。

(福井大学教育学部, 本塚祐一・佐々治寛之)

○ミツオホシハナノミ鈴鹿山系に産す

既に本誌40号に記しておいたように、ミツオホシハナノミ *Hoshihananomia mitsuoi* NAKANE et NOMURA は九州と本州西部から採集されており、その分布東限は兵庫県六甲山であった。ところが、井野川重則氏を通じて鈴鹿山系御在所岳南面から採集された標本を戴いたので、分布の東限として記録しておく。

2♀♀, 三重県菰野町朝明谷, 3. viii. 1975, 岩田圭二採集。

標本を恵与され、発表を許された岩田圭二・井野川重則両氏に心からお礼申しあげる。

(横浜市金沢区, 高桑正敏)

訃報

本会の発起人の一人であり、創立会員の一人でもある、野村 鎮氏は本年1月18日に他界された。まことに悲しい限りで、ただただ絶句するばかりである。

吉田 晶氏が筆頭に野村氏と私が関東に甲虫の会をと計って集ったのが昭和28年(1953)の秋。そして、この3名の他に沢田玄正氏、土生昶申氏、山本 玄氏、安富和男氏等を発起人として正式に本会が「甲虫談話会」の名称の下に発足したのが翌29年1月であった。以来今日まで25年間、いろいろな紆余曲折はあったが、氏は常に会の発展に心を配り、蔭に陽に援助を惜しまれなかった。最初は出版物を刊行しない方針だった会が、途中から「甲虫ニュース」を発行することに方向転換した折にも、氏は積極的にその方針に賛成され、ゆくゆくはコガネムシの解説を書いて頂くことを了承しておられた。しかし、その了解も空しく、氏は余りにも早く他界されてしまった。もう10年は延命されて、日本の甲虫界のために仕事を続けて頂きたかったと願うのは私だけではあるまい。幸にも、氏にはよい後継者が育ち、氏の遺志を受け継いでコガネムシの研究に精進している。また氏の遺された貴重なタイプを含む優れたコレクションも多分国立科学博物館に保管されることになるであろう。氏よ、願わくば、われわれ後継者の今後の活躍を見守りつつ、安らかな眠りに就かれんことを。

私が最後に氏にお目にかかったのは、昨年12月10日に東京農業大学で開催された日本昆虫学会関東支部大会の席上であった。以前から健康に恵まれず、余り採集旅行にも出られない氏ではあったが、また体の調子が悪く病院通いをしておられると聞いて心を痛めていた折でもあるので、一見元氣そうに見える氏の様子を見て内心安堵したのであるが、それから一ヶ月の後に幽明相隔つとは、



前列左より 川崎倫一、野村 鎮、井上 寛、沢田玄正、後列 藤山家徳、黒沢良彦(敬称略)
(1957年10月、日本昆虫学会40周年記念大会の折に東京上野の国立科学博物館裏玄関で久保田政雄氏撮影)

神ならぬ身、誰が知り得たであろうか。今にして想えば「虫が報せた」のかも知れない。懇親会の席で隣の席につかれた氏の影が何となく淡く感ぜられた。あるいはお別れに来られたかも知れないのに、それに気付かず、ゆっくりお話を伺う隙もなくお別れしてしまった自分がかえすがえすも悔まれる。当日の思いなしかやや沈んだ面持の白髪氏の面影が今も私の脳裏に彷彿する。悲しい限りである。心よりご冥福をお祈りする。

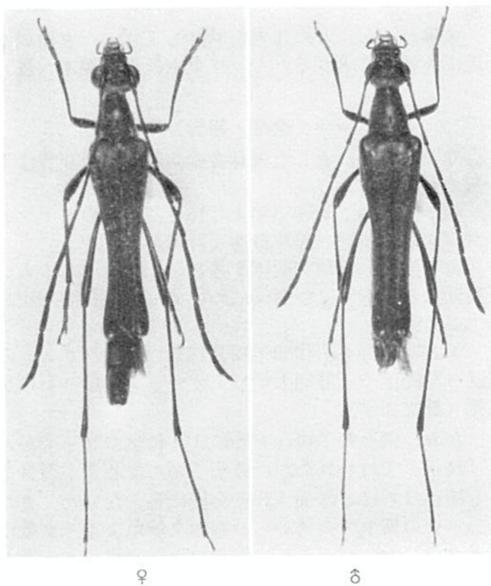
(黒沢良彦)

○ララサンハナカミキリの記録

ララサンハナカミキリ *Strangalia rarasanensis* MITONO, 1938 は台湾北部の拉拉山で得られた1♂に基づき記載された種であるが、その後本種の採集記録はないようである。筆者等は同地桃園県側の標高1500~1700m 付近の日影のアジサイ類の花上で採集することができたので報告する。

4♂♂, 1♀, 台湾省桃園県拉拉山山腹, 27. v. 1978, 下村・斎藤採集; 3♂♂, 1♀, 同上, 29. v. 1978, 下村採集。

なお、現在 *Strangalia* 属はいくつかの亜属に分



けられているが、本種は♂の触角第7~10節の末端に弱いながら凹部を有し、第11節は先端1/3付近に顕著な凹部を有することなどの特徴から *Idiostangalia* 亜属に含まれるべきであろう。また♀は一見 *Strangalia (Pygostrangalia) semichujoi* の♀に似るが体色が全く黒色であること等で容易に区別できる。(東京都品川区, 下村 徹, 神奈川県座間市, 斎藤秀生)

○フジコブヤハズカミキリの羽化例

コブヤハズカミキリ属の羽化例は稀であり、今迄に“長野県のカミキリムシ”(1976) p. 146~148に見られるマヤサンコブヤハズカミキリ及びタニグチコブヤハズカミキリの観察例が知られている。今回埼玉県奥秩父三国峠上より持ち帰った針葉樹の材よりフジコブヤハズカミキリ *Mesochthistatus fuji-sanus* HAYASHI 1♂が羽化脱出した。

1—31. vii. 1978, 羽化脱出。

材は針葉樹であることはわかるが、樹種は不明である。樹皮が剥れているが材質部は硬くしっかりして、蛹室は辺材部に形成されていた。

(東京都中央区, 中村俊彦)

○アマミアカガネコメツキの記録

アマミアカガネコメツキ *Gambrinus amamiensis* ÔHIRA は1953年5月に伊波興清氏によって奄美大島から採集された1雌個体に基づいて大平博士が1966年に記載されたものであるが、珍しい種のように、翌年に同博士によって1雄(奄美大島八津野, 28. v. 1964, H. FUKUDA 採集)が報告されているだけで他には記録がないようである。筆者は東京農業大学所蔵の標本の中から本種を見出すことができたのでここに報告しておく。

1♂, 奄美大島新村, 10. iv. 1962, 立川周二採集。

末筆ながら、この報告をお許し下さった立川周二氏にお礼申し上げる。(東京農大, 鈴木 互)

—<連絡・報告>—

◇昨年実施されました談話会の演題および演者は下記の通りです。

第1回例会：昭和53年4月16日, 台湾のミヤマクワガタ類の新種—黒沢良彦(科博)

第2回例会：昭和53年7月2日, ケンキスイムシ科幼虫の生態および形態について—林 長閑(法政二高)。

第3回例会：昭和53年12月17日, カミキリムシの話—草間慶一(静岡大学)；オサムシの話—石川良輔(都立大学)。

なお、例会終了後、有志による恒例の忘年会が、「鳥正」で行われたが、渡辺 徳、佐藤正孝両会員も遠路はるばる参加され盛会裡に幕となった。また、忘年会の席上で会員からの寄贈文献による「文献オークション」が行われ、別記の会計報告にある通り、

昆虫の器具は「志賀昆虫」へ

日本ではじめてできた有頭昆虫針!!

1, 2, 3, 4, 5号(各号100本180円)

なお、有頭針00号もできました。その他、採集・標本整理用各種器具も取揃えてあります。

〒150 東京都渋谷区渋谷1丁目7-6

電話(03)409-6401(ムシは一ばん)

振替 東京 21129

志賀昆虫普及社

売上全額が談話会に寄附された。文献を寄贈された会員諸氏に心から御礼申し上げます。

◇昭和53年度会計報告

一般会計収支決算報告

収入の部		支出の部	
前年度繰越金	295,136	甲虫ニュース印刷費(No. 41-42)	231,680
会費	142,000	総目次印刷費	159,000
バックナンバー売上金	132,000	通信・郵送費	97,970
広告費	40,000	事務用品費	180
預金利子	2,661	甲虫ニュースNo.44印刷・郵送引当金	91,100
寄附金	39,400	次年度繰越金	71,167
合計	651,097	合計	651,097

特別出版物会計収支決算報告

収入の部		支出の部	
前年度繰越金	322,441	甲虫目録第2輯印刷費	150,500
甲虫目録第1輯売上金	59,370	別刷郵送費	1,200
甲虫目録第2輯売上金	113,340	次年度繰越金	344,496
預金利子	1,045		
合計	496,196	合計	496,196

甲虫談話会

会費(一カ年)1500円, 次号は6月下旬発行予定, 投稿〆切は5月20日。

発行人 黒沢良彦

発行所 甲虫談話会 東京都台東区上野公園

国立科学博物館動物研究部内

電話(364)2311 振替東京60664

タツミの昆虫採集器具

ドイツ型標本箱 木製大 ¥5,000, 桐合板製インロー型標本箱中 ¥1,400, 送料一箱につき都内及第一地帯: 3個以下 ¥1,400, 4個以上 ¥850(以下同様), 第2地帯 ¥1,400, ¥950, 第3地帯 ¥1,600, ¥1,050, 其他, 各種器具, 針などを製作販売しています。カタログを御請求下さい。(¥140)

タツミ製作所

〒113 東京都文京区湯島 2-21-25

電話(03)811-4547, 振替 6-113479